

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32640

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26282206

研究課題名(和文) 子どもの「アートの思考」を基盤にした保育の可能性に関する理論的実践的研究

研究課題名(英文) Theoretical and Practical Study on the Potential of Child Care Based Around Children's Artistic Thinking

研究代表者

植村 朋弘 (UEMURA, Tomohiro)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：50328027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、今日の保育教育における混迷状況を脱する筋道として、イタリアのレッジョ・エミリア(Leggio Emilia)市の保育をモデルケースに、幼児の「アートの思考」を基盤にした保育活動の実験的実践を通して、新しい子ども観・保育観の理論構築をおこなった。またアートの思考による学びを展開するプロジェクト活動に着目し、その活動を観察記録し、振り返りによって学びの意味を見出すことを支援するドキュメンテーション・ソフトウェアの開発をおこなった。また「アートの思考」の育成を専門とする芸術保育士の育成カリキュラムについての提案をおこなった。

研究成果の概要(英文)：This study involved the theoretical construction of new perspectives on children and child care as a means of resolving the confused state of early childhood education today, through the experimental practice of child care based around young children's artistic thinking, with the example of child care in Leggio Emilia, a city in Italy, as a model case. This study focused on project activities that develop learning through artistic thinking, observed and documented these activities, and developed documentation software that supports review of the learning process and identification of meanings. Also, the study makes proposals for curricula for art teachers who specializing in nurturing artistic thinking.

研究分野：情報デザイン、デザイン教育

キーワード：アートの思考 プロジェクト レッジョ・エミリア アトリエリスタ ペダゴジスタ ドキュメンテーション 素材 表現

1. 研究開始当初の背景

(1)日本における保育の動向

今日の保育においては、待機児童が問題となっており、保育所の増設、幼稚園の延長保育、預かり保育が推進されている。また「保育の質」については保幼小の連携への要請から、従来の「遊び」中心の保育から「学び(勉強)」を取り入れた学校教育への適応を重視した保育観へと広がってきている。このような現状から「そもそも子どもはどういう存在であるべきか」について根本から問い直す議論を深める必要がある。

(2)アートの思考とレッジョ・エミリア市の幼児教育

今日の保育における混迷状況を脱する筋道として、本研究では北イタリアのレッジョ・エミリア市の保育をモデルに、幼児の「アートの思考」を基盤にした保育活動に着目した。同市の保育の基本思想は、教え主義への批判から構成主義(J. Piaget)・社会構成主義(V. S. Vygotsky)の学習観を基礎としている。また「アートの思考」とは単に幼児にアートの活動をさせる保育を意味するのではない。子ども達が根源的に世界のモノ・コトとアートの対話し、探求・実験を通して深め発展させ、それらを作品に表現し子ども達それぞれの学びを生み出していく。各幼児学校では「アトリエリスタ」と呼ばれる美術系大学を卒業した、子どものアート活動を指導する者が保育者と共同で保育活動をおこなっている。

(3)プロジェクトアプローチによる保育

アートの思考による学びの過程において、保育者とアトリエリスタは、活動を観察記録し、実践後の省察から学びの意味を見出し、次への質の高い活動へ試みていく。この流れが繰り返されて循環的な展開になり、幼児は独自のテーマを設定し、主体的に活動をつくり出し、創造的な学びを獲得していく。この学びは、「教え」に従属する従来の考え方とは異なり、創造的展開の未知性に向けて、多様な活動が相互に関連し合うという「アートの」対話により変容的学びが展開されていく。これらの学びの活動をレッジョ・エミリアでは「プロジェクトツィオーネ(以下プロジェクト)」と呼ぶ。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

(1)新しい子ども観・保育観の理論構築

レッジョ・エミリア市の保育を表面的に模倣するのではなく、その根本思想を解明し、我が国独自の「アートの思考による新しい子ども観・保育観の理論構築」を目指し、その妥当性と有効性の検証をおこなった。特にアートの思考による子どもの育成を鍵に、それが生み出す学びの様相を捉えた。

(2)ドキュメンテーションツール開発

プロジェクト活動では、その創造的展開を支えるため「ドキュメンテーション」が重要な役割を担っている。ドキュメンテーション

を効果的に機能するPC及びiPhoneを実装するソフトウェアの開発をおこなった。子ども・保育士・保護者・研究者(保育教育・デザイン教育・美術教育)が、保育活動の中で学び合うためのツールである。ツールは、保育実践時の幼児の発話や行為、また幼児と保育者・デザイナーとのやり取りや対話等の観察記録を可能とし、活動を省察し、次の実践活動のデザインや試行を支えるものである。

(3)芸術保育士養成カリキュラムの提案

アートの思考による実践に着目し、子ども・保育士・保護者・研究者の共同で関わるプロセスを捉え、それを基に保育士がアートの思考を取り入れることを目標に、アートやデザインの専門性を理解し学んでいく課程の枠組みについて明示することを試みた。

3. 研究の方法

(1)日本の保育の中で、プロジェクトの活動を展開しているこども園・保育園(E保育園、A保育園)の協力のもと保育実践を通しておこなった。保育活動では、日常の子ども達の活動に着目し、子どもと保育者との対話を捉え、そこで生み出される作品のプロセスの観察をおこなった。また子ども達に向けての表現ワークショップ(以下WS)や、園内研修において保育者向けの表現WSをおこなった。その上で、レッジョ・エミリアに赴き、現地スタッフとのインタビューや研究発表をもとにアートの思考によるプロジェクト活動の意味や理論についてディスカッションをおこなった。

(2)本研究を進めるにあたり、先述の3つの研究目的に対して、次の2つの視点を軸にしたアプローチで展開した。一つは保育実践での「素材(マテリアル)との対話」を軸に研究すること、二つ目は保育における「ドキュメンテーションのはたらき及びその仕組みと意味への探求を軸に展開した。

(3)観察は、保育実践をビデオカメラで撮影記録し、子ども達と保育者との対話について、また子ども達が素材との対話を通して表現する過程について観察をおこなった。それら記録動画をもとに、保育者へのインタビューや振り返りをおこない、研究者によるディスカッションをおこなった。

4. 研究成果

(1)新しい子ども観、素材と変容的学び

「プロジェクト」が展開するとき、幼児と保育者との対話と共に、表現に使う「素材」との対話が、探求活動を創出・変容していくことを突き止めた。素材とは加工、変形、操作等、創造的活動の対象となる素(もと)の材を指す。素材の多様な特性は、表したい意味を表現に導くと同時に、表現されたものから新たな意味を発見させるはたらきがある。これらの発見は幼児と保育者との対話によって広がり、思いもよらない驚きや探求心をもたらし創造的学びが生まれる。我々はレッジョ・エミリアのスタッフと対話を続け、レッジョ・エミリアでの研修会(2015)では、

我々の実践報告から、表現活動において幼児の探求心を高めるため、保育者は設定する素材に意図をもつこと、実際の活動の中で幼児が素材との対話から見出した意味を解釈すること、実践前の予想と事実の相違を創造的学びの萌芽として次の活動につなげること、この循環的展開が変容をもたらすプロジェクト展開に重要な意味をもつことが明らかになった。素材は、対話と学びの多様な可能性を引き出す媒介としての役割をもつ。プロジェクト展開においてアートの思考を支える素材は、保育の中での特定の造形活動が想定される「保育材」とは違い、幼児が自ら探求し、創造的な学びを創出する可能性を切り開く素なのである。

幼児が生活世界のモノ・コトと出会うとき、モノ・コトが語りかけてくる声に全感覚で傾聴し、それらと対話していること、そしてその幼児が聴いている声に大人が耳を傾けることが大切である（カルリーナ・リナルディ）。それはモノ・コトになってみて、モノ・コトが独自の「ことば」で語りかけてくることを聴き入ることである。これらはアートの対話であり、発見や探究心を広げ、素材と出会って表現を生み出す。さらにその表現から変容させながら循環させ、次の活動に繋げプロジェクト展開の鍵とする。発見や探究心や表現の価値は、他者から認められ共感され、新たな対話を生み出していく。プロジェクト展開の学びの変容は、モノ・コトとの出会い、素材との出会い、素材による表現とその過程の出会い、の流れを基に、幼児と保育者との対話の関係性によって生まれる。その時、そのプロセスと対話を追う「ドキュメンテーション」が、重要な役割を担っている。

保育活動では予測しながら進めることを常とし、予測外に起こることを避ける傾向にある。アートの思考は、むしろ偶然性や予想外に起こることが重要であり、そこから発見と探求心が変容していくことで、創造的活動を生み出していく。そこへの着目により、保育の質を高めた新しい保育観への手がかりとなる。これは保育に留まらず広く「子ども学」の発展に貢献するものである。アートの思考とは、単にアート活動に限定するのではなく、様々な物事の探究活動の根底にある思考であり、芸術家・科学者・文学者等が創造的に探究しているときの思考なのである。

(2)ドキュメンテーションのデザイン提案

保育者は自身の保育活動についての観察記録からドキュメンテーションを作成し、それをもとに保育者や子どもとの対話を通して省察により学びの本質を見出し、次の質の高い活動デザインに繋げていく。これらの継続的展開からテーマが設定され、プロジェクトが展開されていく。プロジェクトはあらかじめ設定された目標に向かって計画され、実現していくものではない。子どもとの対話を聞き入れ興味関心のある問いをもとに展開

していく。子ども達の想像力によって表現や実験をもとにテーマが設定され、アイデアを出しつつ持続的探求のもとで創造的に展開していく。子ども達の学びが起きる瞬間とその意味を捉えていくことが不可欠である。

ドキュメンテーションツールの開発は、iPhone・iPodとPC(Mac)を実装するソフトウェアのデザインを行った。初めに現状のドキュメンテーションの問題点を抽出した。

2-1)ドキュメンテーションのはたらき

a) 実践を通して、リアルタイムに起こる子ども達のやりとりを観察し、興味深いことが起こる気配を捉えながら、記録していく。実践中に記録する目的を持つことで、絶えず立ち現れる出来事や子ども達のふるまいへの観察力を高めて関っていくようになる。

b) 記録写真から数枚選抜しドキュメンテーションを作成する。撮影時の意図や気づき、子どもの学びについて、その時の出来事を想起し、リアルタイムには気づけなかった意味など違った観点で理解していく。

c) いくつかの写真を基にエピソードにまとめ、出来事の意味を見出す力をつけていき、次の活動のデザインへ展開していく。

d) ドキュメンテーションを基に他の保育者と語りつつ、エピソードへの解釈を広げる。語りにより、子ども一人ひとりの情報交換によって共有化し、同時に子どもへの解釈の違いなど保育者独自の保育観につなげる。

e) ドキュメンテーションは、園内に掲示され、子ども達自身の振り返りになる。家庭にも配布され、保護者は子どもの様子を知ること、子どもや保育者とのコミュニケーションが起こり育ちへの理解になる。家庭でのエピソードも保育者へ積極的に伝えていく。

f) ドキュメンテーションは、子ども・保育者・保護者とのコミュニケーションの媒介となる。写真からエピソードを想起し、その本質的学びを解釈し、それを見出すことが重要であり、語り合いが鍵となる。

2-2)ドキュメンテーション作成の問題点

a) ドキュメンテーションは日々撮影された数十枚の写真データから選抜し、文章作成ソフトで作成される。しかし後日以前作成したドキュメンテーションや、その中の写真について特定した検索が困難であり、一過性のデータ利用になっている。例えば個人の発達過程など別の視点から出来事を再編して捉えるなど、データベースの再利用ができず、出来事の意味を見出す可能性が閉じられている。

b) 写真は出来事の一場面であり、データとして時間の前後関係が切り取られている。また映し出された事象の関係性が固定的であるため、想起から読み取れる内容に限界がある。数日後になると、読み取りの範囲は限定される。

2-3)Easy Snap・Easy Snap Archiverの開発

保育者自らが実践中に記録するためのiPhoneアプリ Easy Snap と、記録したデータ

を編集・保存するための Mac 上を実装するアプリ Easy Snap Archiver を開発した。

a) Easy Snap の機能



図1 Easy Snap

Easy Snap は、興味深いシーンを簡易に写真撮影することを基本機能としている。常に撮影 5 秒前の音声録音される。また撮影後に起きたシーン展開を記録するため「録音」「録画」で追加記録できる。またキーワードなどテキストメモを入力し、画像へのマーキングが可能である(図1)。撮影後は録画・録音データは再生され確認

ができる。その日の記録データは、リスト表示され、その中から必要なデータを選択し、Wi-Fi 経由で PC (Mac) に転送される。またデータは iPhone 上でカレンダーによって管理され、記録の流れを見ることができる。

b) Easy Snap Archiver の機能

Easy Snap から送信された記録データを保存・編集が可能である。アーカイブ化(記録保存)と検索機能によってデータベースを再編集・再利用し、活動を多面的に捉えることを可能にする(図2)。



図2 Easy Snap Archiver

「データベースウィンドウ」は、Easy Snap から Wi-Fi 経由で転送されたデータを管理するウィンドウである。写真に付帯した録画・録音・テキスト・アノテーションデータも転送される。データは、カレンダー上で管理される。キーワード検索が可能で、検索により過去のデータをリストアップし、ドキュメンテーションを再編集できる。

「キーワードウィンドウ」には、重要なキーワードを登録していける。キーワードはデータベース上の各記録データにタグとして設定し、検索の効率化・簡易化ができる。またデータの再編集の可能性と解釈を広げる。

「ドキュメント作成ウィンドウ」では、データベースウィンドウから選択された写真のレイアウト及び編集をおこなう。編集時に書き加えたテキストはデータウィンドウ内に同期される。プリントアウト及び PC 上では録画・録音データが再生できる。

「アーカイブウィンドウ」は、ドキュメン

ト作成されたデータを管理するウィンドウである。キーワード検索により、アーカイブ化されたデータベースから必要なドキュメントを検索する。

以上の開発を踏まえ、ツール利用において注意しなければならないことがある。活動を支援するツールは、機能的・効率的に設定されたものであるが、ツールの使い方や使うことの「意味」を理解しなければならない。プロジェクトを推進するときの「子ども達にとって学びとは何か」を十分に理解した上で、使っていかなければならない。ツールを使いこなせば機能に満足し、目的が達成できたつもりになってしまうことがあるが、プロジェクトによる「学びの本質」を探求し、理解した上での使用が不可欠なのである。

(3) 芸術保育士養成カリキュラムの提案

保育士がアートの思考について理解するには、作品を制作する表現 WS 等の実践が最も早道である。表現することと、その表現結果とプロセスについて振り返りをおこない、他者との対話を通して表現の中にある意味を解釈する力をつけることが必要である。実践活動において不可欠なことは、WS を通して実践的に表現を「やってみてわかる」ことが重要である。その際、表現作品を成り立たせている「素材」の特性に着目する。特に保育者とデザイナーと協働でおこなうことが重要である。素材の特性を意味づけることの広がりや豊かさをデザイナーの視点から助言を受け、保育の視点を融合させることが大切である。それにより、素材によって生み出される表現が持つ学びの可能性を実感していくことができるのである。

3-1) 素材を媒介にした表現の意味を抽出

アートの思考について探求するに際して、表現作品を成り立たせている素材を「子ども・保育者・デザイナー」の3つの視点を媒介する関係

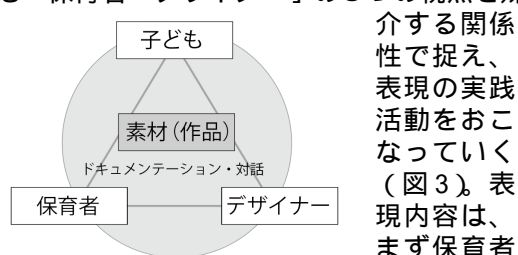


図3 子ども・保育者・デザイナーを媒介する素材

自身の「経験を可視化表現すること」が効果的である。それは素材が生み出す形を、自己の経験の中にある具体的な意味を形の中に見立てることで語りとして表現し、表現活動の中にある学びを発見し実感していくことができる。

3-2) 子どもの作品の意味を発見・理解する

子どもの作品の中にある「素材の特性」に着目し、その特性を使って見立てられた子どもの経験の思い・意味を見出していく。素材の特性に注意深く着目することで、子どもにとって素材をもとにした表現が、子どもの学び・成長・発見を導き出すものであることを理解できるようになる。そして表現作品の中

にある形の多面性（形を構成する様々なレベルからなる部分同士の関係や全体との関係により多様な見立てや解釈を生み出す性質）が、子ども一人ひとりの独自の学びを誘発し、新しい意味を見出す働きを理解していく。それにより表現された対象のプロセス及び結果について、子どもとの対話を通して共感し深く味わうことができるようになる。そこに理解と同時に問いと発見が生まれ、次の活動のデザインへとつながっていく。このつながりが持続的に展開することでプロジェクトの学びの活動が生成していく。そして子どもの持続的な関わりと成長過程の中で表現による学びの意味を発見していく

3-3) 芸術保育土育の表現 WS 教育課程

a) デザイナーの指導のもとで、保育者自ら表現 WS を実践し、素材の独自の性質や可能性を見出す。一つの素材を取り上げ、その素材と徹底的に（例えば、手だけを使って）対話し、その素材特性の多様性・独自性を理解していく。対話することで、素材の持つ多面的な特性を発見していくことを経験していく。またその表現された形を味わうように観察することで、予想もしなかった偶然によって生まれる形を見立てることによって意味を構成する。その際自己の経験を表現すると効果的な意味づけができる。実践の後、ディスカッションをおこなう。

b) 多種多様な素材についても a) と同様の試みをおこない、それぞれの素材を比較する。また他の素材との組み合わせによって起こる表現の広がり等、素材間の関係性を捉える。また選択した素材を加工する道具との関係も検討する。

c) 保育者はデザイナーと協働で「子ども達に向けた表現 WS」を企画デザインする。その WS の学びのねらいや意図を確認し、子ども達の学びの意味を事前にディスカッションし、表現内容に従った素材を検討する。その実践結果から、予想していたこと、予想外で起こったことが子ども達にとってどのような学びであったか解釈する。表現 WS は、子ども達の日常の文脈に則ったものが望ましい。

d) c) の省察をもとに次の実践のデザインを試みていく。「実践、振り返り、企画デザイン、実践」への繰り返しによって持続的表現活動としての繋がりの意味を見出す。

e) 特に c) の実践では「子ども達が表現活動の中での素材との対話」「子どもと保育者の対話」「子ども同士の対話」を観察し、素材の特性をいかに引き出し、意味付けていくのかを捉えていく。これらの活動をビデオカメラで記録撮影し、実践後デザイナーとともに省察をおこない、デザイナーの視点から表現による学びの意味を見出していく。その際、デザイナーが捉える素材と学びの関係性を捉えていく。また学びに対するデザイナーの視点と保育者の視点の違いを捉え、それらを視点融合させながら新しい保育観の学びとして意味付けをしていく。

f) 素材に着目した表現 WS では「一つの素材」「いくつかの素材の組み合わせ」「多種類の素材の提示」など、色々な素材との関わりを試みていく。また一つの素材（例えば粘土）を取り上げ、同じ条件で子どもの「年齢など発達段階」に従った学びの違いを捉えていく。

g) 日常の保育活動について保育者自身によるドキュメンテーションをおこなう。ドキュメンテーションは、日々の子どもの学びの瞬間を写真撮影で記録し、それにテキストで説明を加え、活動の中の子どもの達にとって意味を捉える。それを A4 用紙数枚にまとめていく。ドキュメンテーションは、クラス or グループでの活動を記録したものと、一人ひとりの活動の意味を記録したものの 2 種類を作成する。ドキュメンテーションを作成することで、子ども達・保育者・保護者間の媒介となる。3 者の学びの理解の変容を捉え、ドキュメンテーションの意味を理解していく。そしてドキュメンテーションがプロジェクトの学びの展開にとっての意味と、アートの思考による活動をデザインすることの重要性を理解していく。

(4) 今後の課題

プロジェクトによる保育実践活動を通して、学びの変容プロセスを追いながら、その仕組みを明らかにしていく。その際、素材の役割との関係性及び子ども・保育者との対話に着目し、ドキュメンテーションの働きについて探求を深めていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 40 件)

佐伯 勝, 学びの場が生まれるとは, 『教育心理学会年報』, 第 54 集, 2015, pp.153-160. (査読無)

佐伯 勝, とともに生きる保育, 『ほいくしんり』(大谷保育協会編エイデル研究所発行), vol.8, 2015, pp.2-21. (査読無)

刑部 育子, 連載第 11 回 学び 美的次元からの考察: 子どもと表現(その 2), 『キリスト教保育』(キリスト教保育連盟), 551(2 月), 2015, pp.34-35. (依頼論文)

郡司 明子: 「からだ・気づき・対話のアート教育-小学校の授業実践からその意義を探る-」, 『子ども学』(萌え文書林), 第 3 号, 2015, pp.113-132 (査読有)

佐伯 勝, 子どもを「教える対象としてみない」ということ, 『発達』, 第 35 巻(通巻 138 号), 2014. pp.2-9. (査読無)

〔学会発表〕(計 31 件)

植村 朋弘・森 真理・刑部 育子・郡司 明子 他 2 名: 子どもの 100 のことばとプロジェクト・アプローチの関係性を考える, 第 70 回日本保育学会, 自主シンポジウム, 2018, p.211. (査読無)(宮城県仙台市)

伊藤 美帆・森 真理・植村 朋弘: ドキュメンテーションへの取り組みからもたらされた保育者の変容, 第 70 回日本保育学会, ポスター発表, 2018, p.647. (査読無)(宮城県仙台市)

植村朋弘・森眞理・刑部育子・郡司明子 他 1名：素材との対話を通して生み出されるアートの学び，第 69 回日本保育学会，自主シンポジウム，2017，p.200.（査読無）（岡山県倉敷市）

伊藤美帆・森眞理・植村朋弘：「ドキュメンテーション」への取り組みからもたらされた保育者の変容，第 69 回日本保育学会，ポスター発表，2017，p.580.（査読無）（岡山県倉敷市）

Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Y., & Gunji, A. "Expanding the Horizon of Pedagogy of Listening from the Japanese Perspectives: Having Dialogue with Philosophy and Practice of ECEC in Reggio Emilia" Poster Session:（査読有），EECERA 2017, Conference at Bologna University, Bologna, Italy.

Mori, M., Gyobu, I., Uemura, T., Gunji, A., & Sayeki, Y. Ensuring dialogue between children and materials for children to become protagonists in creating a sustainable future: Responding Reggio Emilia approach. 69th OMEP World Assembly and International Conference, 2017, タマリスカンファレンスセンター（クロアチアオパティア）.

植村朋弘・森眞理・刑部育子・福田泰雅 他 1名：表現プロセスにおける子どもと保育者の対話を考える第 68 回日本保育学会，自主シンポジウム，2016，p.158.（査読無）（東京都小金井市）

植村朋弘：学びの活動を振り返るためのドキュメンテーションツールの開発，日本デザイン学会，デザイン学研究，第 63 回全国発表論文，2016，pp.10-11.【グットプレゼンテーション賞】（査読無）（長野県上田市）

Sayeki, Y. How a second person approach is misunderstood. (The discussant to the invited lecture by Vasudevi Reddy, "Feeling minds in engagement: The origin of social understanding.），発達心理学会第 27 回大会，2016，（招待講演）（北海道札幌市）

Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Y., & Gunji, A. "Providing Young Children Rich Experience with Intelligent Materials as the Key for Developing Their Aesthetics and Creativity." (Poster Presentation:（査読有），EECERA 2016, Conference at the Helix/DCU (Dublin City University), Dublin, Ireland.

植村朋弘：乳幼児のモノとの対話による表現と活動に関する研究，日本デザイン学会，デザイン学研究，第 62 回大会発表論文，2015，pp.152-153.（査読無）（千葉県千葉市）

植村朋弘・森眞理・刑部育子 他 2名：デザイナーと保育者の協働による幼児の表現世界のひろがり，第 68 回日本保育学会，自主シンポジウム，2015，（愛知県名古屋市）

佐伯胖，子どもを「ヒューマン」として見る，日本乳幼児教育学会第 23 回大会，2014，（基調講演）（千葉大学教育学部）

Mori, M., K. Matsua, S. & K. Noguchi. " Bridging Children, Adults, and Community: Examining the Role of Chiba City Independent Welfare-Nursery-Schools Association through Having a Dialogue with Theory and Practice of Reggio Emilia, Italy."（共同）67th OMEP World Assembly and Conference, Poster Session, 2015, Omni Shoreham Hotel, Washington DC, USA.

植村朋弘・佐伯胖・刑部育子・他 2名：デザイナーと保育者の協働による乳児の表現活動，第 67 回日本保育学会全国大会，自主シンポジウム，2014，（大阪府大阪市）

〔図書〕（計 10 件）
佐伯胖：かかわることば、かかわらない言葉 佐藤慎司・佐伯胖編『かかわることば』東京大学出版会 2017，pp.23-61.

佐伯胖：「二人称的アプローチ」入門 佐伯胖編『「子どもがケアする世界」をケアする』ミネルヴァ書店、2017，pp.33-77.

森眞理：『子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門』（単著）小学館、2016，127p.

佐伯胖：ヴァスデヴィ・レディ著 佐伯胖訳『驚くべき乳幼児の心の世界 - 「二人称的アプローチ」から見えてくること - 』ミネルヴァ書房，2015.363p.

レッジョ・エミリア市自治体幼児学校・乳児保育所、森眞理・渡邊耕司和訳、『レッジョ・エミリア市自治体の幼児学校と乳児保育所の指針』（共同訳本），レッジョ・チルドレン刊，2014，20 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植村 朋弘 (UEMURA, Tomohiro)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：50328027

(2) 研究分担者

森 眞理 (MORI, Mari)

鶴川女子短期大学・国際こども教育学科・教授

研究者番号：20319007

刑部 育子 (GYOUBU, Ikuko)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：20306450

郡司 明子 (GUNJI, Akiko)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：00610651

(3) 連携研究者

佐伯 胖 (SAEKI, Yutaka)

田園調布学園大学・人間学研究科・教授

研究者番号：60084448